■マルティナ vs 覗き魔@女湯種漬け即堕ち

魔物討伐のために旅をする女闘士マルティナ。彼女は旅の途中、ホムラという里に立ち寄ることになる。
ホムラの里……そこには名物の蒸し風呂があり、旅の疲れを癒すために利用することにした。

「蒸し風呂なんて珍しい……たまにはこういうのも悪くないわね♪」

久々の贅沢に心が浮き立つマルティナ。
ただ……湯浴み着に着替える途中、不吉な噂も耳にするが。

（え……この蒸し風呂、覗けるの？）

どうやら女湯は簡単に覗けるようになっているらしい。なんでも男湯と繋がった道があり、そこを通して行き来が可能だとか。
実際に女湯に入ると、確かにもう一つの出入り口がある。そこから共通の道が男湯と繋がっているのだろう。
この出入口からなら、簡単に覗くことができる。しかも噂の一つによれば、覗くだけでなく女湯に侵入する者さえいるのだとか。

（もしかして、それで他にお客がいないのかしら？　いや、でも……）

マルティナ以外の客がいないのは気のせいだろうか。まだ昼間であるため、ただ空いている時間なだけという可能性もあるが……
もしかすれば、実際に覗き魔が存在し、そのせいで女性客がいないのでは……などと考えてしまう。

「……考え過ぎよね。まさか、本当に入ってくる男なんていないわよね……」

不安に思うものの……常識的に考えて、そんな真似をする者などいないだろう。仮にいたとすれば、風呂屋が既に対処しているはずだ。
下らない気掛かりを捨て、マルティナは蒸し風呂の加減を愉しむ。旅の疲れが少々溜まっていたこともあってか、蒸気の熱と香りが堪らなく心地良い。

「はぁ～～極楽極楽♪」

――……
――――……

ぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんっ♥♥
「おっおっおっおっおっおっおっおっ♥♥♥」

女湯でくつろいでいたマルティナ。しかし、数分後には男根に犯され、四つん這いになって激しい肉突きで連

続絶頂させられていた。

　男湯と通じる入口。そこから、いきなり少年が跳び込んできたのだ。
　リラックスしていたマルティナはまさかの事態に対処できず、成すが儘に組み伏せられる。
　湯の効果もあってか肉体は開放的になっており、少年の体格とあどけない顔に見合わぬ絶倫巨根をすんなりと受け入れてしまい……
　結果、数分と保たず絶頂に次ぐ絶頂を重ね続けていたのだ。

「キミっ♥♥♥　何してるのっ♥♥♥　ここっ♥♥♥　女湯っ♥♥♥　おっ♥♥♥　またっ♥♥♥」
　ぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんっ♥♥
「ちんぽっ♥♥♥　中で大きくっ♥♥♥　まっまさか♥♥♥　出すつもりなのっ♥♥♥
　やめなさいっ♥♥♥　今なら見逃してあげるから♥♥♥　中出しだけはっ♥♥♥」
（出されるっ♥♥♥　そんなっ女湯なのに♥♥♥　こんな子に……覗き魔なんかにイカされまくりながら……♥♥♥）
　ドピュッ♥♥　ビュルッ♥♥　ドビュルルルルルルルッ♥♥
「おぉぉぉおぉぉぉおぉぉぉ♥♥♥　風呂ハメっ♥♥♥　イッグぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♥♥♥」

　女湯の中で少年に種漬けアクメさせられるという、あまりに現実離れした事態
　噂が真実……いや、女体を凄まじい快楽で責め上げるという噂を超えたものだと確認しながら、別の意味で極楽を味わうのだった――

「お♥♥♥　おほぉぉ♥♥♥　覗き魔ちんぽで♥♥♥　孕んでるぅぅぅ♥♥♥」

◆

（あの覗き魔くん……！　今日会ったら捕まえてあげるわ……！）

　翌日。マルティナは再び蒸し風呂に通っていた。もちろん理由は慰安、そして少年へのリベンジだ。
　少年――覗き魔の奇襲に、とてつもない快楽陵辱を味わったマルティナ。犯されるだけでなく絶頂を数えきれないほど味わわされるという屈辱を水に流せるはずもなく、また会ったら、と、闘志を滾らせている。
　前回は浴場セックスでの連続アクメと種漬け大絶頂により失神してしまったため逃がしてしまったが、注意していれば侵入に気付けるはずだ。
　ちなみに今回は湯浴み着として、『あぶない水着』を着用している。覗き魔を誘いやすいよう、下着に近いレベルまで布面積をカットした一品だ。

「はぁぁ……♥　やっぱりここはイイわぁ……♥」

　覗き魔少年に警戒しながら腰かける。が、その瞬間に湯の効力を全身で浴び、温かさに包まれる感覚で警戒心を忘れてしまいそうになる。
　実際、二日連続で覗きに来るとは限らない。どこか官能的にさえ感じる熱感の中で、マルティナは今度こそ存分にリラックスするのだった……

（まぁ……二回連続で襲われるなんて、有り得ないわよね……♪）

――……
――――……

体験版はここまでです。続きは製品版で！